

特53-525



\*1200800240151\*

大關和子著

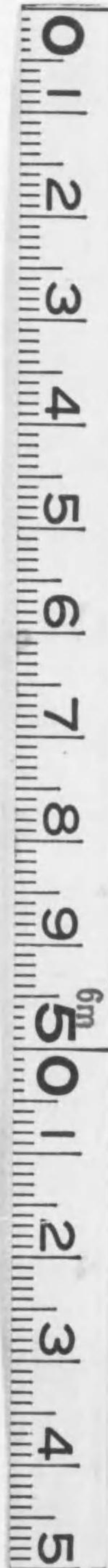
派出看護婦心得

看護婦會藏版

253

339

始



大關和子著

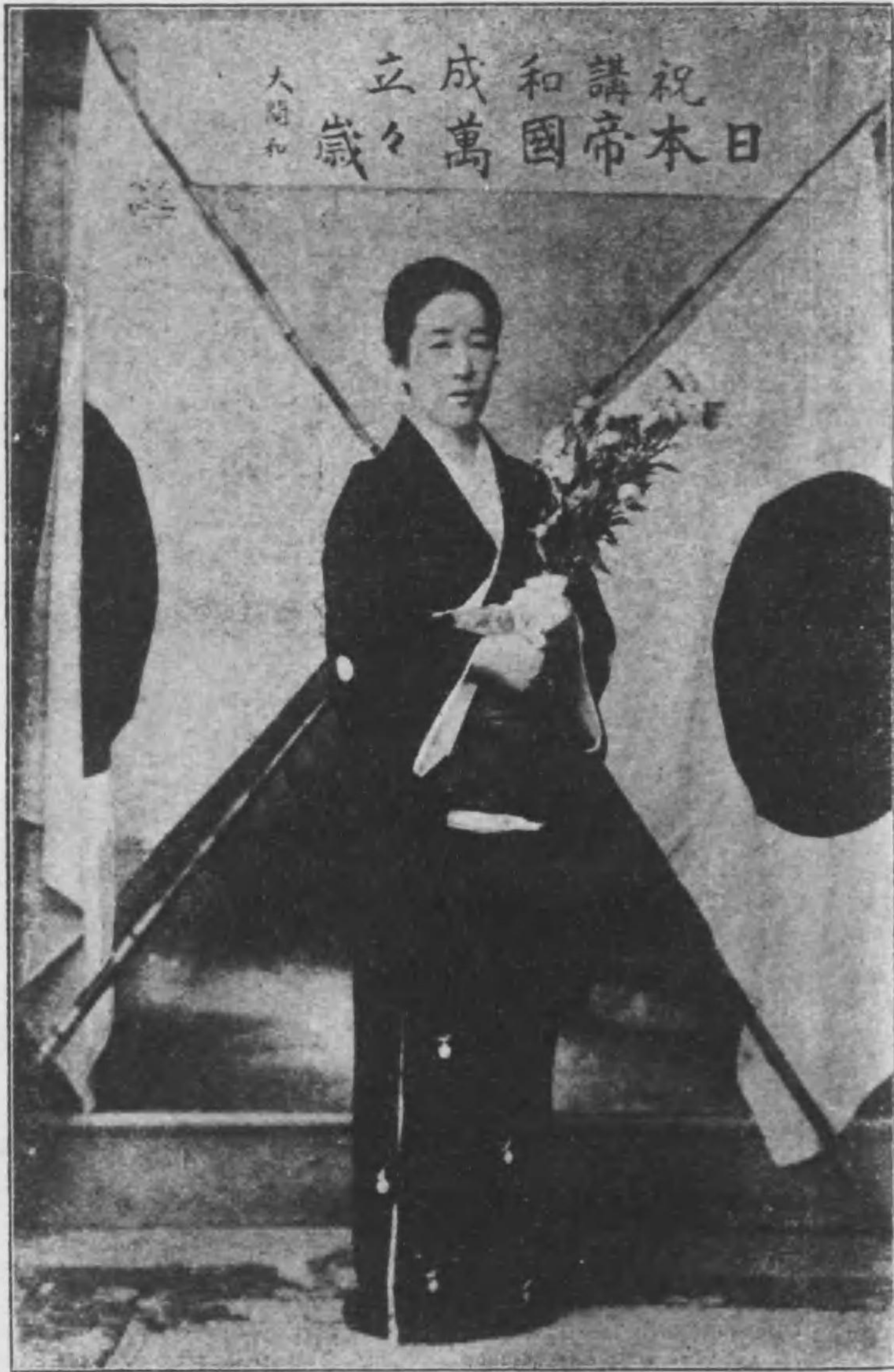
派出所看護婦心得

看護婦會藏版

明治  
30 12 28  
內交

妾數年間看護を以て天職と奉じ献身犠  
其任にあたるに雖も淺學短才にして姉妹  
等を教導するにたらず唯天賦の健康を謝  
するに共に満腔の信愛を以て不幸なる同  
胞の看護に従事せんことをするものなり。

此小冊は同窓の姉妹等の爲め参考に供せ  
んことを著はせし物なれども近年近縣に於  
て悪疫大に流行し毎年看護婦の不足を生  
し爲に諸處の隔離所に出張し同業の姉妹



等に接する事あり。  
中には規律正しく病舎を守るものあれど  
も多くは其順序を誤り病舎の混雑消毒の  
不完全を見る是によりて大に感ずる處あ  
り之れ此小冊を公にせし所以なり。

著者記す

# 派出看護婦心得目次

一 看護婦派出心得	一
二 病室に就ての注意	二
三 病人に就ての注意	二
四 醫師に對する義務	三
五 家族に對する務め	四
六 自身に就ての注意	五
七 患者に於て終日勤むべき順序	六
八 赤痢病舎に聘せられし時の心得	一四
九 隔離病舎に於ての服務時間割	一四
十 死体取扱方	四三

附 録

第一 消毒藥製法

一 石炭酸水 ..... 五〇

二 昇汞水 ..... 五一

三 石灰乳 ..... 五三

第二 病室ノ消毒

一 被具ノ消毒 ..... 五五

二 器具ノ消毒 ..... 五六

三 煙器及便所ノ消毒 ..... 五六

第三 醫語

一 呼吸系用語 ..... 五八

二 消化系用語 ..... 五九

三 循環器 ..... 六一

四 甲神經及精神系用語 ..... 六二

五 乙聽<sub>耳</sub>及視官用語 ..... 六六

六 泌尿器用語 ..... 六七

七 生殖器用語 ..... 六八

第四 藥量概略比較表

一 瓦崗護量表 ..... 六九

二 水藥滴說比較 ..... 七〇

三 看護婦實業の唱歌 ..... 七三

目 次 終

派出看護婦心得

大關 和著

夫れ看護婦たらんとする者は、先つ普通の看護  
 學を修むるを要す。精神に於ては仁慈、敬愛、溫和  
 忍耐、謙遜にして舉動靜肅、品行方正、言語を慎み。  
 醫師に對しては、能く其命を守り患者に對して  
 は貴賤上下の別なく一様に信愛を以て其本分  
 を盡さざるべからず。

第一、患者に聘せられし時は、時計、體溫器、體溫表、  
 日誌等の用意を忘るべからず。

二  
患者に至りし時は、先づ患者の容體を伺ひ、病人の爲めに、入用なる器械の置場を考へ病室にては、病人に對するに、最も謙遜丁寧にして、能く時間を守り、萬事注意して看護に従事せざるべからず。

### 病室に就ての注意

第一、清潔及消毒法、空氣交換、溫度平均等に注意すべし。

### 病人に就ての注意

第一、體溫脈搏、呼吸に注意し、次て藥用、食物、治療等凡て時間を守る事。眠、不眠凡ての排泄に注意する事。

### 醫師に對する義務

第一、謙遜丁寧にして其命せらるゝ處に従ひ能く藥用治療の時間を守り、秩序正しく患者の病狀は明細に記載し、來診の時は之を示して參考に供すべし。常に尊敬の意を表し、投藥治療上の事に至りては、決して口を容るゝべからず。唯命せらるゝ處を堅く守り、言語を慎み假にも不敬、



不遜の舉動あるべからず。

### 家族に對する務

温順にして能く其家風を悟り、起臥の時間、食事の時間等に假令不完全の廉ありとも、決して不快の舉動を顯すべからず。又食物不充分なりとも、決して口外すべからず。病家に於ては、家族皆な病人の爲めに心を勞し、轉倒して居る者なれば出來得る丈け之を助け、慰め、己れの事など決して心配なさざる様注意せざるべからず。又病人の爲になすべき事は皆

己れの責任なれば、成べく他人を勞することなく、而して病人をして満足せしむる様心を用ゆべし。

### 自身に就ての注意

舉動靜肅、精神平和、言語を慎み、能く忍耐し、体身を清潔になし、食物勞動共に能く衛生に適する様勤むべし。

### 患家に於て終日勤むべき順序

朝食前に爲すべき事。起き出ると直に嗽ひ手水

をつかい、髪を結び、衣服をあらため、病室に入る。  
 第一、患者の體温を計り脈搏呼吸を測定し、日誌  
 に記載する事。

第二、患者に嗽ひ手水をつかはせ、直に食前の薬  
 を與ふる事。

第三、病人の顔に芥のかゝらさる様、西洋手拭の  
 類を以て覆ひ、掃除をなし窓戸を充分に開き空  
 氣の交換をなすべし。若し病人大患にあらざれ  
 ば、此際病床を交換するをよしとす。空氣交換の  
 爲め窓戸を開き置くは六分間を定時とす。

第四、牛乳、スープ等の滋養食を供する場合には、

此時を以てすべし。次で朝食を供す、凡て病人の  
 食物は自から責任を負て供するものとす。薬用  
 食事も、之を用ひたる前後には、必ず含嗽をな  
 さしむべし。最も病人の都合によりて自分食事  
 を先になすもあり、臨機其家風我は病人の命に  
 從ふべし。

第五、患者に朝食を供し、後ち自分食事をなすべ  
 し。

朝食後九時或は十時にても、醫師に命せらるゝ  
 時に於て兼用薬を與る事。十一時に食前の薬  
 を與へ、十一時三十分の體温を測り、十二時

に晝食を供す。

午後二時乃至三時にても、醫師の命する時に於て再び兼用薬を與ふ。三時半に體温を測り、四時に食前の薬を與ふ牛乳等を用ゆる患者ならば、體温測定後直に與ふるを良とす、五時に夕食を與ふる事。最も食事起臥の時間は、家風に由て大に異なるものなれば、適宜に與ふるを良とす。夜分は八時に於て兼用劑を與へ後靜に安眠を促すべし。此外、尙滋養飲料又は治療等ある時は、定まる時間外に於てなすべし。最も大切なる治療の時は此限りにあらず。

時間を怠り定時を失するは、業務混亂して治療上大に不利を來す事あり、能く注意せざるべからず。

又大病にして助手を得し時は、必ず責任を分擔し、服務混亂せざる様になすべし。或は晝間看侍、夜間看侍と別つ時は朝食時即ち八時に交代し、夜分八時に交代するを以て等分たるべし晝間看侍の者は朝食事を供するを以て初とし夜八時の薬を與ふるを以て終りとす。夜間看護の者は、夜分爲すべき事は時間を定めて或は滋養を與へ、或は注射を爲し、或は氷嚢を

貼し、或は藥を與へ、又は、含嗽、排便等、其間に於ては、褥瘡の注意、身体摩擦等、又冬日に於ては、暖爐の注意等怠るべからず、朝は病人の醒覺せざる前に自から髪を結び、嗽ひ手水をつかひ、衣服を更ため、病室に來り第一暖爐の火を適宜に燃し病人醒覺せし時は、先づ嗽ひ手水をつかわせ、藥を興る等次で體温を計り、病人の都合に依ては前きに體温を計を事もあり含嗽濟み次第藥を與ふべし、而して順序正しく食前の仕事をなし終り朝食を供せんと云ふ處にて晝間看侍と交代するなり。

又三人にて看護に従事なす時は、一人は、普通人と同しく朝六時より夕十時迄勤むるものとす一人は朝六時より正午十二時迄就眠し、午後二時に交代し、病室に入る。又た他の一人は午後二時より八時迄就眠して、九時に交代す、晝間看侍の者九時に交代し、入浴して眠につく、斯くなす時は三人の看護婦を以て、晝夜兩人つゝ、附添ひ居らるゝなり、重症者にありて、手のかゝる病人なれば、斯くなす事双方のために好しとす。夫れ病ひは、種々あれは、一樣に看護なす能はず。其病症に依て適宜の看護するものとは雖も殊

に傳染病の如きは、獨り病人を看護するのみの目的にあらずして、一家村市都府或は全國にも及ぼすものなれば看護婦の任又大なりと謂はざるべからず、殊に近年多く流行する赤痢病の如きは嚴重なる豫防消毒をなさいれば、増々蔓延するものなり。故に政府に於ても其豫防消毒を嚴重になすべき旨全國へ布達せられたり。然れば流行の際は各警察署より官報の二字を附し打電せらるゝ者なれば、是れに應し派出する看護婦の責任最も大なり。看護を以て天職となすもの此國難に際し、不幸なる同胞を助け、以て

國恩に報せざるべからず。該病たるや主に貧困なるものに多く患家の不潔また謂ふに堪わざるものあり。是を清め是を消毒し、是が豫防を爲す事また容易にあらず。實に困難なり。快く此困難に堪え其任務を全ふする處のものは神に事するの信仰を持つもの、國に報ゆるの忠心厚きもの、とにあり。又此責任を盡すを得ず、半途にして歸會し、又は同僚と不和合等にて、患者及び患者に不快を感せしむる等あるものは、神に對するの信仰もなく國に報ゆるの節操もなく、同胞に盡くすの愛情もなく、人類の面を覆も猶禽獸

に異らざるものなり。看護の重任を負ふ者能く自身を顧み慎まざるべからず。

### 赤痢病舎に聘せられし時の心得

第一。病舎の規律を定める事。各責任を分擔する事。起臥、薬用、食事、治療の時間を正しく守る事。清潔法（掃除、洗濯、空気の交換）及消毒法（便器掃除、襦袢の洗濯）を厳に守る事。

### 隔離病舎に於て服務時間割

多数の患者にして同僚の看護者多くある時は、各責任を分擔し、一人は薬餌掛り、一人は清潔及消毒の掛り、又都合によりては日誌の掛りを定め猶幾人もある時は各助手を附ける事必要なり。

薬餌掛りの者は、朝起き出ると直に、先づ自分の手水を使ひ髪を結び、衣服を更ため、病室に入り、多数の病人をして順次に含嗽を爲さしめ、先きに済し方より又順次に薬を與へ次で顔を洗ひ手を清める等の勞を取り、自由叶はざる病人は、叮嚀親切に含嗽をなさしめ、手水をつかはせる

事。

消毒及清潔掛りの者は、先づ自分の嗽ひ手水を  
なし、身を清め、衣服をあらため、病室に入り、重症  
患者の襦袢を第一に交換し、腰の廻りの不潔な  
るものは、温湯に石炭酸水を加へ、軟かき手拭に  
て静かに拭ひ清むるをよしとす。重症患者の襦  
袢交換終りて後、便器を消毒室へ送る、但し各々  
名を記し或は順序を立て間違はざる様になし  
全患者記名用紙に、各々便質を明細に記載する  
事(粘液血便粘液膿便軟便中粘液血液を混する  
褐色軟便中僅に粘液血液を混す、黒色軟便中粘

液を混す又は水様便中僅に粘液血液を混する  
等(便質を記載なしたる後、其便を不潔灌に廢捨  
し、便器を能く洗ひし後少許の石炭酸水を容れ、  
病室に備ふ。便器掃除の後は直に不潔掛りに申  
出し、排泄物の消毒及煮沸せしむるものとす。若  
し直に煮沸なしあたはざる時は、石炭酸水或は  
石灰を容れて消毒なし蓋を嚴重になす事(但し  
石炭酸は二十倍の者を等分に用ゆるか又石灰  
なる時は全十プロセント即(十倍)位の量を以て  
結晶せし儘之を田ゆ)而して再び消毒の爲火に  
懸け、充分に徹菌殺滅法を施すべし。器を洗ひし

桶又灌等の水他に洩れざる様不潔灌に入れ、煮沸せしむるを良とす。

尙其消毒室を消毒なすには板の間なれば石炭酸水を散布し、後ち雑巾を以て拭ふべし。土間なる時は石灰乳をまくべし。消毒終りて後、自から手足を能く洗ひ、衣服を交換し、直に病室の掃除をなすべし。室内掃除の際、餘分の者有る時は他室に出し、窓を充分に開き、能く掃除をなし、叮嚀に雑巾を以て拭ふべし。若し又少許にても不潔物の附着する疑ある時は、石炭酸を散布し、一定の消毒をなして後、能く拭ふべし。此際手洗水を

交換し痰壺等ある時は、皆能く掃除し清洗して病床に備ふ。病室内の掃除消毒等なし朝食を與ふべし。然して後、自分朝食を喫するものとす。食物は粥スーブ卵黄等を與るを良とす。其量は、患者の身体強弱疾病の輕重によりて、多少の差異あるものとは雖も、大凡病症熾なる患者に於ては粥汁二碗、スーブ五勺、卵黄二ヶ位を適當とす。然れども醫師の命ある時は此限りにあらず。下痢の止まるまでは卵白を禁す。卵白を用ゆる時は益々下痢を起す者なり。注意すべし。一定の經過後下痢も四五回、出血も止み、粘液僅



になりたる時は、粥汁も少々粥を加へ、而して卵も半熟或は蒸て與ふべし。半熟を造るには味噌汁或はスープの汁にて拵へ與ふるを良とす。又渴甚だしき時は、湯を少々、與ふるか或は冷水にて含嗽をなさしむを良とす。決して水を與ふべからず。若し與ふる時は下痢を加ふる者なり又赤痢は渴甚だしきものなれば、初より粘滑物を與ふるを良とす。葛湯最も良し。一日二三回位與ふ可し。然れども餘り食物過度なる時は下痢を加ふる故に悪し。本人の望みに任す可し。食物終りし時は、直に含嗽をなさしむべし、病人食物終りし時は、直に含嗽をなさしむべし、病人食物

事終り次第、直に熱湯を懸て食器を能く洗ひ、流し元を能く片附て後、自から會食堂に入るべし。自分の食器も亦た能く注意して、食事の時は必ず熱湯にて器具を洗ひ、消毒して食物を盛るべし。不潔物に、とまりし蠅等の媒介する處となり、傳染する危険あれば、注意せざるべからず。而して食物は消化しやすきものを食し、鶏卵赤酒等を少々許づ、用ひ自から傳染を豫防すべし。決して美食を爲すべからず。唯健康を保つにあり。然なから先方に於て斯くの如き備なしとて、決して不平がましき舉動あるべからず。

日誌掛りの者は、体温、脈搏呼吸等を記し、薬用時  
間、飲食物の用量及時間を記し、便質其量、及回数  
を記し、尙摘要部に昨夜以來の容体を記し、其他  
治療譬は灌腸入浴腰湯等落なく記載すべきな  
り。

食物掛りのものは、食後三十分休息して病室に  
入り、患者の求めに應じて適當の看護に従事し、  
九時半頃に兼用薬を與へ、十一時に食前の薬を  
供すべし。薬用食事の前後はいつも含嗽を爲す  
事なれば、前後に冷水を床頭に備へ置くべきな  
り。

清潔及消毒掛りの者は、朝食後暫時休息なして病  
室に入り、重症者のしめしを交換し、含嗽水等を排  
捨し、灌腸を爲すべし。灌腸薬は醫師の命に従ふ  
者とは雖も、夫凡心得居らざるべからず。多量の  
出血ある患者は單寧水但し0.50/0のもの全量五〇  
〇、〇灌腸なすを良とす。鹽剝硼酸水等は何れも  
2.0/0位を良とす。全量は何れも四乃至五〇〇、〇を  
常とす。  
其他硝酸銀等用ゆる事あるも、醫師の命を能く  
守るべし。五百倍以下六七百倍の物を用ゆるべ  
し。餘り強き液を用ゆる時は、腹痛を感ずるもの

なり。若し腹痛ある時は、食鹽水を以て再び灌腸すべし。直に痛みを止むるものとす。而して硝酸銀は、日光に當りて分解するものなるが故に其溶液を黒色或は青色瓶に蓄ふべし。尙此薬は普通の水を以て溶解する時は分解して溷濁を生ず。故に蒸溜水を以て解くものとす。食鹽水灌腸はたゞに硝酸銀水の刺戟を止むるのみならず。腹痛及裏急後重を輕快せしむるものなれば、患者は此灌腸を最も希望するものなり。腹痛及裏急後重烈しくして、患者の求むる時は一日三回位は之を施すを良とす。他の薬は刺戟するもの

もあり。又中毒を起すものもあれば、幾回も爲すべからず。然しながら醫師の命ある時は此限りにあらず。

治療上灌腸せんとする時は、先づ其事を患者に通じ、薬液の仕度をなし、自から手を清め肛門用油と紙とを仕度し及灌水桶に液を充して病床に至り、左を下に横臥し膝を屈せしめ後方に座し稍々肛門を顯し嘴管に油を塗布し大氣を驅除し、靜かに肛門に挿入して液を送り、而して出來得る丈け薬を保たしむべし。一人の灌腸終りし時は直に嘴管を消毒し、嘴管に油を塗りて他

の患者に施すべし。幾人にも斯くの如く順次に施すべし。重症にして肛門活約筋其作用を失ひ、不随意の時は、患者を仰臥せしめ油紙を敷き臀下に腰枕を容れ、便器を挿込後灌腸を爲すべし。而して其液排泄するまでは暫時(二十分)其儘便器に寄せ置くべし。全患者に灌腸を施せし後は、必ず便器を掃除なすべし。薬液によりては便色を變ずる事あれば、驗便の爲悪し。灌腸後身体疲勞を感じる時は赤酒或は鹽里母等を少許づゝ供すべし。

灌腸終り次第、其器械を清洗し、嘴管を能く消毒

し洗滌室の隅に懸置くべし。此際重病者の襦袢を交換し煮沸すべきものは不潔灌に入れて蓋を密閉し、煮沸掛りの者に渡すべし。襦袢腰卷等の汚れし者は、消毒液(三十倍石炭酸水)に浸し置くべし。一二時間の後之を清洗し、人家に遠く乾すべし。

但し屋根の上に出すを最上とす。假令消毒せし者と雖も、萬一不充分なる時は、人家に近く乾すは危険なれば注意せざるべからず。乾燥の後は誰か觸るゝも障なし。是等の仕事を終り次第中食を喫すべし。

薬餌掛りは晝食の仕度粥汁、スープの加減を試み、卵白を去り、卵黄を供する等、又自由の叶はざる患者には、親切丁寧に食せしむる事。其掛りの者のみにて足らざる時は、日誌掛之を助け、猶不充分なる時は消毒掛りの助手之に適當なる助手をなすべし、然しながら食事の時は、注意の上にも注意なし、清潔の上にも清潔を要するものなれば、假令手足を消毒し、豫防衣を交換するも消毒主任の看護婦は之に關係すべからず。消毒掛りのものは、他の看護婦か患者に晝食を供する間に、自分も食事をなし、他の看護婦の食事の

際交代して病室を守るべし。  
 薬餌掛りの者は、順序正しく患者の晝食を供し、器械を清洗し之を納めて後食を喫し、食後暫時休息して病室に入るべし。午後一時より二三時に至るまで醫師の來診あるべし。其時は嚴肅に之を迎へ、豫防衣を供し、一定の消毒をなすべし。病室に入るや、日誌を携へて之に従ひ病床に至りては被具を半ば開除し、胸邊を開き凡て醫の手をわすらはさざる様務むべし。而して病状は日誌に記載する處を漏なく報告し、猶醫師の質問ある時は言語靜肅に之に答へ、診察終り檢便

せらるゝ時は、名々其便器の蓋をとり示すべし。廻診終りし時は、豫防衣の上より一定の消毒をなし、手洗水及消毒水を供し、豫防衣を脱して元の處に掛け、醫師の命せらるゝ事ある時は慎みて之を奉じ失念せざる様注意すべし。醫師が病舎を去らんとする時は、一層消毒を叮嚀になし、敬禮を以て之を送るべし。醫師の退舎後直に藥瓶を揃へ、名々の札を改め兼用劑の瓶或は袋を揃へ、尙消毒液乃ち含嗽劑灌腸劑等取落さざる様注意し以て明日醫師の出張せらるゝ迄不都合なき様請求せらるべし。但し醫師廻

診の際隨從する者は、日誌掛り及び藥餌掛りたるべし。消毒掛りの者は診察濟次第に腰湯をさせ、或は入浴の世話をなすべし。腰湯を施す時は初め盥に湯を汲み少許の鹽を入れ、但し茶椀に一盃位温度を試み患者を裸体となし、足部を前に出し臀部のみを盥に入れ、頭部より全身を叮嚀に洗ひ、顔は別鉢に湯を取り洗べし。而して全身能く温まりし時に湯より出し、親切叮嚀に之を拭ひ、濕氣なき様になして衣服を交換し床上に送るべし各患者の脱き捨てし着物は不潔物附着して居るものを三十倍の石炭酸水に浸し

置き、一二時間の後に之を洗滌すべし。別に汚れなき物は腰湯終り次第直に其盥に入れ、洗滌室に送り、又た湯をつかはせし場所は能く消毒して、拭ひ、盥につけし衣服は曹達及石鹼を以て丁寧に洗ひ、度々清洗して乾すべし。此疾は殊に不潔なるものなれば、清潔及消毒を充分に施さざれば、其蔓延を防ぐを得ず。又腰湯及洗濯なせし湯を庭前にこぼすべからず。庭の隅又は畑の中に穴を穿ち、之に捨つべし。病毒其内に在るの疑ひある時は石灰を以て消毒すべし。衣類腰巻等有毒附着せしものと認むる時は、一定の消毒を

なす。故に洗濯水の内に感染力を有するものは非物と信すれども庭前に捨る事は嚴禁す。

又檢便の後は直に之を廢捨し、洗滌し能く拭ひ、常の如く消毒液を入れて床傍に備ふべし。残らず便器を消毒せし後は、常の如く直に煮沸せしむべし。便器掃除の後は、必ず消毒衣を着換ゆべし。假令傳染病室と雖も不潔室にて着したる消毒衣を病室にて着する事を禁ず。便器掃除の後は、其室を充分に消毒すべし。

薬餌掛りの者は、二時半に兼用劑を與へ、三時に葛湯、或は牛乳等粘滑飲料を供すべし。最も重病

者にして食氣不振の者には無理に供するの要なしと雖も病勢減ずるの時は、渴を訴ふ者なれば、湯水を減じ、粘滑飲料を與るを良とす。故に午後三時頃を以て最も適當なる時と定む、葛湯は胃腸の加多兒に最も良き飲料とす葛湯を造るには適當なる鍋に葛粉或は砂糖を入れ、少しづつ水を注ぎ、能く混和し容解せし後、熱湯を注ぎて適宜に加減すべし。餘り固きは飲料とならず。葛湯は害なき者なれば、求めに應じて食せしむべし。葛湯を供せし後三四十分に於て、夕の体温を測り、脈搏、呼吸を數へ溫度表に記し、日誌に記

載し、四時に至れば食前の藥を供し而して夕食の仕度をなすべし。夕食を供せし後は、食器を丁寧に清洗して納め、各病人に含嗽をなさしめ、後自から食堂に入るべし。

消毒掛りの者は先きに食事を仕度し病室に入りて臨時の用事に從事なし、重病者の糞褌を交換し、便器の掃除をなし、常の如く消毒液を容れて病床に備へ含嗽水等の注意をなし、後蚊張をつり各々入浴し、清潔なる浴衣を着せ、引番の看護婦は入浴後直に寢室に引き取り、當直の者は病室に殊り八時に兼用劑を與へ含嗽する等、斯



くて終日定まりし要用は終る後、當直の看護婦  
 は若し軽症患者多く、病室平穩なる時は就褥す  
 べしと雖も重症患者ある時は徹夜すべし。輕  
 症患者のみにて徹夜するの要用なき時は病室  
 の隅へ休息するものとす。然しながら、當直の任  
 を負ふ者なれば熟睡なす能はず、病人に呼るゝ  
 時は一言にて醒覺する様常に注意なすべし。  
 嗚呼不幸にも此惡疫に罹りて寂寥たる隔離病  
 舎に容れられ、樂み多き家を捨て或は慈愛深き  
 父母の膝下を離れ或は最愛なる妻子をも殘し、  
 良人に別れ此隔離所に來りて他人の看りを受

るものゝ如何なる感情にか打たるゝならん我  
 等看護を以て天職と奉ずる上は、慈惠の天旨を  
 貫きて不幸なる同胞の爲めに滿腔の同情を表  
 し、眞心を以て之を看護し、内には己れが本分を  
 全ふし、外には國恩の萬一に報せざるべからず。  
 患者は種々六ヶ敷き好みをなし、又我儘を言ふ  
 ものなれば、能く忍耐して不幸なる同胞を思ひ  
 やり、凡て患者の求むる處を正しく答へ之に應  
 ずべし、然ながら病人の害となる事は假令如何  
 ほど求めらるゝも能く之を諱し、斷念せしむべ  
 し決して不敬不遜の舉動あるべからず。

腹痛ある患者には、石炭酸、温濕布を施し、上より懷爐を貼すべし。石炭酸温濕布を施すには、先に白木綿一丈を求め、木綿二布を以て腹帶を造り、(但し二尺七寸ばかり)残る四尺餘りのものを五十倍位の石炭酸水(但し土鍋にて温むるか、或は熱湯にて解く)に侵し、固く絞りて下腹一面に貼し、之に適當なる油紙を當て、綿を充分に貼し、右の腹帶を用て直に懷爐を貼す、懷爐を貼するは温氣を保たしむる爲なり。若し子供にして温布帶の温を保たしむる能はざる場合には、單に懷爐のみを貼するか、或は充分綿を當て腹帶を用

ゆべし、腰湯を施すも下腹温法の目的なり。温まりし後、湯よりあげ、能く之を拭ひ、靜に床上に送り、冷さいる様になすべし。

近年温奄法に反して、冷奄法を用ひらるゝ事ありと雖も、未だ好結果を見ず。病人は不快の感をなし、下痢を増し、子供は到底懸け得べき者にあらず、然れども醫學上理論にてらして命せらるゝ者なれば、止なく之に従はざるを得ず。而して此患者は大に衰弱をなすものなれば、病舎の造構不完全加ふるに、被具の不足等より、數々胃痛を起す者なり。斯かる場合に於ては、第一温む

るを良とす。熱湯ある時は金盞に手拭を入れ熱湯を注ぎ之を絞り、心窩に貼し、再三之を交換すべし。或はバツブ芥子泥等を貼るも良とす。芥子泥を造るには水或は湯を以て適當にかき、方四五寸のリント布に延べ、上より薄紙をあて局所に貼すべし。若し芥子なき時は、鹽を焼きて貼すも可なり。再三温めかへす故に最も重寶なるものとす。頭痛ある時は、冷奄法を施すべし。冷水中に手拭或は白布を浸し生しぼりになして之を貼す。或は氷嚢を用ゆ氷嚢を貼する時は能く注意して

細に碎き、氷嚢中に四分の一或は三分の一を入れ空気を驅除し、口を固く結びて平になし軟き布に包み前額部に貼すべし。身体怠倦の感ある時は軽く摩擦すべし、但し心臓部に向て擦るべし。足部冷氣を覺ゆる時は湯婆を入れるべし。湯婆を用ゆる時は、厚き布に包み、直接に膚に附ざる様に注意なすべし。口中乾燥する時は、度々含嗽せしむべし。嘔氣ある時は心窩に氷嚢を貼すべし。渴ある病人には沸騰せし湯或は麥の養汁を冷

して飲料とす。又は鹽里母を與ふ可し。  
 衰弱せし患者に湯を遣せる時は先きに赤酒を  
 一口與へ而して入浴せしむべし。萬一腦貧血を  
 起せし時は、直に水平に臥せ赤酒を與へ、冷水に  
 て顔を拭ひ靜かになすべし。自然快復するもの  
 なり。  
 入浴の際は必ず臥褥を交換すべし。  
 衰弱せし患者を入浴せしめし後は必ず何にて  
 も滋養飲料を供するを良とす。  
 頭痛及逆上の感ある時は腰湯或は脚湯を施す  
 を良とす。其方法は鹽に湯を汲み溫度を試み臂

部或は脚を入れ毛布を以て全身を覆ひ發汗を  
 度とし湯より出して之を拭ひ衣服を交換し温  
 かに臥しむべし、衣服交換の際は何時も温める  
 を良とす。  
 病人臥床を離るゝ時は、何時も臥褥のゆのみを  
 直し或は蒲團を交換すべし  
 病室溫度の平均、及空氣交換は常に之を勤むべ  
 し。

### 屍体取扱ひ方

患者容体悪しく、將に死に陥らんとする時は、直

に醫師に申告し時機を誤らざる様になし、怠りなく親切に看護を盡し閑靜になし、假りにも高聲を發する等の事なき様注意すべし。醫師の命せらるゝ時は藥を與へ、注射を爲し、冷水を與ふる等、出來得る丈け親愛を盡し、安然の終命を遂しむるべし。患者死に歸する時は尙褥中に置き直に醫師に申告し検査を乞ひ其指圖を待つべし。屍体は他の患者に見せざる様、顔面は、直に白布にて被ひ、屍室或は別室に移すべし。屍体は死後強直を發せざる前に、其位置を正し納棺前に全身を石炭酸水にて能く拭ひ陰部肛門には消

毒綿花を固く詰め、最も叮嚀に消毒法を行ひ、衣服の上より石炭酸を度々散布し、乾さざる様にするべし。焼場に送る時には靜肅に之を見送り、死亡せし室は、最も注意して衣類夜具等消毒場に送り、其他の器械も消毒し活染せる襦袢等は焼捨するを最良とす。而して石炭酸を充分に散布し、能く掃除なし良氣を通すべし。衣類夜具等は勿論破損せざる者は熱氣消毒なすべし。陶器金物類は熱湯を以て消毒すべし。塗物護謨製の者は昇汞水或は石炭酸水を以て消毒すべし。當時はフォルマリン瓦斯消毒法の施行せらる

ればこれを以て第一の消毒とす家屋物品等一つも破損せずいかなる間隙をも滲透して消毒の効を完ふす、其仕方は流黄薰蒸のごとく凡ての物品を室内に入れ戸障子を閉ぢ目ばりをなし其内に瓦斯を發生する器械を入れ技手出張して之が任にあたる田舎に於ては未だ此備へなければ、焼却、熱氣消毒、煮沸消毒、藥物消毒等なり。

隔離所を閉鎖する時は、自分の取扱ひし者は悉く皆消毒して研きあげ能く拭ひ納め衛生委員に引き渡すべし。

傳染病看護婦の責任は最も重大なる物なれば必ず輕卒に取扱ひ、他に傳播せしむる等の虞なき様注意すべし。人間として我天職を勤むるに當り、決して人の前に於てなすべからず、神の前に在りて忠實に之を勤め其本分を盡すべし。

今や日進月歩の文明の世に在りながら我等婦人の社會は未だ其途に進むの力なく、智慧なく徳なく、自からを重ずるの志操もなく、何の理想なく只だ風に動かざる、粗がらの如き、有様なり。

封建時代の婦人の有様は今更喋々するも益な

し。鎖國の禁の解かれて以來、我國に於ても西洋諸國の風に習ひ學校を建てられ病院を設られ、看護婦を養成せられ、慈善會を設られ、或は矯風會の組織となり、或は孤兒院の開設となり、其他慈善の事業等續々設られしと雖も、素是等の業たるや、敬神の志なくば決して成功を期すべからず。

蓋し其目的たるや、人智を研き靈性を發達し、貴重なる生命を保護せん爲めに外ならず。然るを今の世の人、其基礎の何れにあるを知らず、我位置を知らず我事業を解せず我天職を重ずるの

志操なし同胞よ、我姉妹よ。我等人間の靈魂は何れより來り何れに歸するものなるや、又我々人間は何の爲に世界に現れしものなるやを研究し其真理の何れにあるを認め身を修め、道に進み、終生に於て與へられたる我天職を全ふし、やがて限りある肉体より我が靈の離れん時、永遠限りなき天國に擧げられん事を希望せよ。嗚呼神よ。此罪深き世を救ひ給ひ。我々に天職の何物たるを教へ給へ。其任に堪るの力を與へ給ひて、我が身の本分を全する事の出來得る様祝福を垂れ給へ。

# 附録

五〇

## 第一 消毒藥製法水

### 石炭酸

石炭酸は各種の病毒を撲滅する力あり。通例是を製するには等分の酒精又は、偪里設林にて溶解する者なれども、二物とも高價なる故に通常單に熱湯を以て溶解するものなり。衣類等に用ゆるを除き、其他の消毒には更に鹽酸若くは、酒精を三四分加へて使用するを良とす。

### 一磅の石炭酸を二十倍に溶解する方法

瓶中に結晶したる者を温湯中に入る、か又は火邊に置き(但し栓を緩め)、溶解せし者を甕又は桶に入れ、一升程の熱湯を注ぎ能く溶解せし後、水を加へ全量五升到充すべし。(但し一磅四六〇、〇を升到直して二合五勺餘之に二を懸けて五升となる)

### 昇汞水

昇汞水は消毒の効著しく猛毒にして無色無臭



なり。爲めに危険を招き易き虞あり故に蓄貯使用する際は充分注意を加へ、其危険を防がん爲め、本品百分中に硫酸銅一分を加へ青色を帯しむべし。

又昇汞水の効を失はざる他の色素を加へて着色するもよし。

1.0/100 の昇汞水を造るには (千倍)

昇汞一、〇、塩酸五、〇、水九九四、〇を混和して貯ふべし。

是を製するには、昇汞一、〇を器中に入れ、塩酸五、

〇。或は食鹽少許を加へ、少量づゝ水を注ぎて溶解し全量一〇〇〇、〇に充すべし。(昇汞は猛毒にして消毒の効大なりと雖も、赤痢の便は蛋白質多き故に、消毒の効薄し)

### 石炭乳

石灰乳とは生石灰一分に水九分を混和し製したるものを云ふ。

石灰乳を造るには、石灰一升に九升の水を加へて攪拌し用ゆべし。(但し石灰乳は用に臨みて製するを良とす)

生石灰は少許の水を注ぎ、熱を發して崩壊するものを用ゆべし。石灰は水を注げば熱を發する者なれば濡手を以て觸るゝ時は火傷する事あり、注意すべし。

石灰乳は便所、及流し溜、床下等に用ゆるものなり、便器に用ゆる時は始末悪し。

## 第二 病室の消毒

病室は出來得る丈け清潔になし、大氣消毒最も良し、疊板の間は充分に石炭酸水を散布し、能く拭ふべし。

## 被具の消毒

夜具、衣類等は熱氣消毒最も良し。熱氣消毒器は各病院に備あれども田舎の隔離病舎には臨時の用に供する爲に大釜小桶様の物を以て造りし物あり。是を用ゆるには能く蒸氣の洩れざる様に目ばりをなし。檢溫器を備へ附け、溫度百度となりてより三十分間を定時とす。假令二時間以上三時間を経るも百度以下にありては無効なり、注意せざるべからず。又洗濯して損せざる品は熱湯を注ぎて洗濯す

(但し單物、裕上着の類)

器具類の消毒

金屬及陶器の類は熱湯を注ぎて磨くべし。塗物、護謨製、時計、体温器の如きものは、30%の石炭酸水にて能く拭ひ、太陽に當つべし。

便器及便所の消毒

便器に受し便を消毒するには、50%の石炭酸水を便量と等分に入れ卅分乃至一時間其儘になし。

置き、消毒即ち殺菌の後、地をほりて埋むるものなり。然ながら赤痢病の如き多数の患者ある場合には、前に述べる如く煮沸せざるべからず。當時は博善株式會社に於て凡て汚物を取かたつけ充分消毒して呉ますれば東京に住居する者はこれに依頼せし方完全ならんと思ひます。傳染病消毒の事に就ては政府に於ても法律第三十六號其他内務省令を以て豫防消毒法に就る傳染病豫防法施行規則として發布せられまして故に地方長官又は檢疫委員等其令に従へて指揮せらるゝものなれば其指揮に従ふべし。

第三 醫語

呼吸系用語

呼吸  
呼吸困難  
呼吸息迫  
鼻音  
鼻閉塞  
噴嚏 クシヤミ  
咳嗽  
失音

喘鳴  
衄血  
咯血  
咯痰  
血痰  
透明粘調  
塊狀  
膿性

嘔噁 コエガシワガレル  
喘息  
淺表呼吸  
窒息

臭氣  
黃綠色  
鼾聲  
シヤエンストノ呼吸

消化系用語

食欲亢進  
食思  
咀嚼  
咬牙  
嚥下困難

食欲減退  
食氣不振  
煩渴 ノドカワク  
乾嘔  
嘔吐

噯氣

惡心

腹鳴

膨滿

吃逆

吞酸

嘈噦

舌帶

饑餓

食後膨滿

口渴

ゲツブ

ム子ノヤケル

吐血

釀酸

苦悶

流涎

吐瀉

疝痛

血便

便秘

水瀉

下痢

下血

ゲツブ

胃部重壓ノ感

胃痙 シヤク

胃痛

胃部拏責

腹痛

腸出血

暴瀉

裏急後重

粘液血便

粘液膿便

循環器

心機亢進

悸動

脉搏頻數

脉細數

鬱血

溢血

不整

緩除

微弱

早脉

疾脉

遲脉

徐脉

充實

充血

貧血

硬實

淺表

重複

結代脉

チャノゼー

大理石狀紋理

神經及精神系用語

知覺麻痺

半身不隨

運動麻痺

裁癱

攣急

人事不省

痙攣

失神

搐搦 ヒキツリ甚シ

眩暈

角弓反張

昏倒

汎發性痙攣 全身ヒキツル 精神發揮 ノボセルヲ

牙關緊急 齒ヲ喰ヒシバルヲ 精神逆上

鈍麻 精神錯亂

癱瘓 知覺運動共ニナキヲ 精神朦朧

偏癱半身知覺運動共ニナキヲ 嗜眠、安眠

昏睡 衰弱シテ眠ニ陥シヲ 惡寒

夫語 言葉正シカラザル  
 吃語 ドモリ  
 膽語 ウワゴト  
 忘語  
 搔痒  
 痒覺  
 奇痒  
 蟻行様感  
 疲倦  
 疲勞  
 恩備心

寒慄  
 戰慄  
 震慄  
 煩悶  
 苦悶  
 脫力  
 強直  
 勁直  
 強結  
 神恩抑鬱  
 鬱憂

厥冷  
 疼痛  
 刺痛  
 灼痛  
 搏動痛  
 壓痛  
 鈍痛  
 肥厚  
 落屑  
 蓐蒼  
 無欲狀

蟻走覺  
 熱覺  
 冷覺  
 覺風  
 皮膚乾燥濕潤  
 水腫  
 浮腫  
 發汗減少、過多  
 冷汗  
 痴呆  
 死戰

上衝

瞳孔散大

瞳孔縮小

泣涕

喜悅

笑

欠伸

咬牙

罵詈

頭内騒鳴

口角

哆開

驚怖

醒覺

震顫

潰瘍

發疹

聽官及視官用語

重聽 キコヘハルシ

錯聽 キ、タガヘ

幻視

羞明 マボシ

直視 ミツメルヲ

亂視 アヤマリミル

弱視

夜盲 トリメ

遠視

耳鳴 ミ、ナル

耳聾 ツンド

眼球震盪

斜視 ヤブニラミ

複視 オ、クミユル

錯視

全失明盲 メクラ

近視 チカメ

泌尿器用語



尿量減少  
 尿量增加  
 暗綠色  
 尿線細大  
 螺旋狀  
 清澄、溷濁  
 尿失禁

缺乏  
 褐赤黃  
 稀薄  
 滴歷  
 分裝、臭氣  
 不隨意排尿  
 遺尿

生殖器用語

白帶下  
 勃起

遺精  
 陰痿 上ニ反對

第四 藥量概略比較表

一磅 四六〇、〇  
 一オンス 三〇〇、〇  
 一匁 四〇  
 一合 一八〇、〇

瓦蘭謨量表

ミリ瓦 〇、〇〇一 千分ノ一瓦  
 センチ瓦 〇、〇一 百分ノ一瓦  
 デシ瓦 〇、一 十分ノ一瓦

瓦蘭謨	一、〇	一瓦
デカ瓦	一〇、〇	十瓦
ヘクト瓦	一〇〇、〇	百瓦
キロ瓦	一〇〇〇、〇	千瓦
ミリア瓦	一〇〇〇〇、〇	萬瓦

水藥一瓦ニ付キテノ滴量比較

水	十六滴	油類	二十滴
鉛錯	同	酒精丁幾類	二十五滴
醋酸	同	舍利別	十二滴
稀鹽酸	同	依的兒	五十滴

杏仁水	同	薄荷	二十五滴
稀硫酸	同	結列阿會篤	二十滴
法列兒水	同		

英重量と瓦蘭謨との比較

一磅	四五三、五九二七瓦
一匁 <small>オンス</small>	二八、三四九五瓦
一匁 <small>グレイン</small>	〇、〇六四八瓦

我

一匁もんめは  
四瓦しつらむにあたる

看護婦實業の唱歌

實に我々の業は  
言ひ盡されず西風東風と  
朝またきより起き出て  
先づ第一に火を起し

繪にもかゝれず言葉にも  
飛び廻り又走せ廻り  
嗽ひ手水もそこ／＼に  
朝げの仕度の素を置き

病室内の掃除なし  
長き廊下の拭掃除  
不幸を救ふ一つのはし  
思へば心も身も軽く

排泄物をよく清め  
賤の手業も同胞の  
慈善事業の初めぞと  
やがて廊下もふき終り

室内空氣の交換と  
注意なしつゝ、体温器  
喇ひ手水をつかわせて  
朝げの仕度にかゝらんと

室内温度の平均を  
懸て熱度を記載なし  
薬を與へ静づ／＼と  
こん爐の前に坐をしめて

先づ第一に牛の乳  
其拵へも出來揚り  
患める者の採る箸も  
不快の顔を見る時は

スープ粥湯やむし玉子  
各病室にくばりつゝ  
或は勇み或は又  
供に患ふる心をば

取り直しつゝ、各の／＼は

自から朝げの仕度をと

會食堂くわいしょやどに入りいにける  
食事終をわりて各の／＼の  
髪かみは垢あかなく飾かざりなき

これぞ朝あさげの勤つとめなり  
部屋へやに歸かへりてなであげる  
直なほき心を其儘そのまゝに

結むすびあげたる束たばねがみ  
身みのたしなみとこそ思おもえ  
清きよき印しるしや白しろ仕立したち  
持場もちばく／＼に手分てわけして

重おもき勤つとめめに従じゆう事じなす  
衣服いふくも同おなじ飾かざりなき  
手術しじゆつ着つつけて身みをかため  
己おのか職務しよくむに従じゆう事じなす

先まづづ外科げくわにては朝あさまだき  
スプリマスプリマタータールフルフエエノノールール

沸わかし置おきにし湯ゆをもちて  
洗滌せんじやう液えきを造つくりつゝ、

カルボルカルボル硼酸ほうさん昇しょう汞こう水すい  
防ほい腐ふなしたるこんこんふふらす

各藥液かくやくえきに浸ひたし置置きき  
陶器とうきの皿さらに絞しぼり上あげ

後交換のち仕度じどなし  
治療ちりやうにこそは取とりかゝる  
患者やまの疾やまひは皆みな異かり  
痔ぢローロー痲りんしつしつヲヲルルヒヒシシス

醫員いゐんの出仕しゆつしを待まちちつゝも  
幾いく十じゆ人と數かずしらぬ  
腫物しゅぶつになやむ者ものもあり  
或あるは負傷ふしやう者もの火傷くわしやう患かん

皆夫みなそれく／＼に治療ちりやうなす  
口内こうない洗滌せんじやう鼻び洗滌せんじやう  
膀胱ほうこう洗滌せんじやう胃い洗滌せんじやう

醫員いゐんの助手じゆしゆをなしつゝも  
尿道にやうだう洗滌せんじやう耳みみ洗滌せんじやう  
咽喉いんこう塗布ぬふや齒齦しじん塗布ぬふ

醫員の指圖に従ひて

治療なしたる患者には

傷の大小深淺に

依りて手當も異なれど

先づ第一に繃帶を

採りて患部を洗滌し

其創面に從て

昇汞石炭サルチル綿

醫員の命せるガゼを當て

錦も覆ふて繃帶を

纏絡なして安靜に

休む様にと注意なし

手術患者のある時は

麻醉器械を仕度なし

患部に依りて入用の

器械を先きに防腐なし

手術洗者を呼び出す

案内につれて静くと

出で来る患者の容体は

或は勇み或は又

兼て覺悟も今更に

屠所の羊のそれならで

手術臺にぞ登らるゝ

面影見るも氣の毒と

思ふ心を取り直し

麻醉器械を手を持ちて

情け用捨もあらなくと

懸ける心ぞ我ながら

鬼女とや云わん鬼人とも

人は云ふらめ神ぞ知る

病魔の爲めには鬼ならめ

人の爲めには天使ぞと

自から心を勵して

病魔退治に取りかゝる

先きに患部を洗滌し

醫員の刀を當てるより

流るノ血しほを拭ひ取る

いかに急ぎの場合にも

凡ての器械糸ガーゼの

傷の不結果を見る時は

惠も深き先生の

注意の上にも注意なし

我が責任を盡しつゝ

法の如くに繃帯を

送り届けて安靜に

再び歸る手術室

器械を清め磨きあげ

膿盆又は金盥

掃除済して拭き終り

洗ひ出し又すゝぎ出し

冷却するを待ち兼ねて

昇汞水は千倍に

皆それ／＼に漬け納め

乾くを待ちて巻きをさめ

防腐木綿に注意なし

消毒法を怠るな

消毒法を怠りて

獨り患者の不幸かは

面に傷を負ふ如し

慎む上にも慎しみて

漸く手術も出来あがり

懸けて患者を病室に

休む様にと注意なし

後かたづけも心して

定まる置場によく治め

磨き上げ又拭き治め

繃帯洗滌ガゼ防腐

再度銅壺で湯を通し

絞り上げつゝガゼ揃ね

カルホル液は五十倍

繃帯のして懸け終り

あす交換の仕度なし

消毒薬をあらためて

手術の時に差支へ

外科看護婦の勤なり

数多ければ中々に

學び得たりし方法と

不足の品は請求し

なき様常に注意なす

室附看護の責任は

言ひ盡すべき様もなく

患者に就きて経験を

力となして我が志操  
基となして注意なし  
又姉となり友となり  
心を尙く身を低く

天賦の愛と信とを  
不幸の患者の母となり  
樂しみ慰め慈しみ  
勤め〜て責任の

重きを常に記憶なし  
爲すべき手當も異なれど  
時間用法よく教へ  
薬の質をよく覚え

各病症に随ひて  
先づ第一の服薬の  
食前食後に用ゆべき  
過ちなき様注意なし

重症患者の容体は  
言ふも更なり眠不眠  
薬用治療に至るまで  
醫員に供し診断の

體温脉膊呼吸等  
滋養排泄正不正  
一々日誌に記載なし  
助けと爲すを勤めとす

醫員の指揮に従ひて

治療なすべき場合には

冷電法や温電法

電気療法吸入法

爲すべき事も易けれど

採るべき注意は各の〜に

沸き出る知慧と知識もて

發明なして勉むべし

慈善の二字を目的となし

或は腹帶濕布帶

こは一通り學びなば

千種萬種の病の數

備る愛の泉より

自から患者の救護法

思へは重き看護の任

いさみ勵みて勉むべし

明治三十七年一月

徳大寺侯爵御病床日誌寫し

看病婦勤務時間割

午前六時より 午後九時迄 佐々木 かく

午後一時より明午前六時迄 北原 壽

午後九時より明午後一時迄 大關 和

右の時間割にて晝夜二人つゝ御附添御看病申

上候

御日誌も各受持時間丈責任を負て書し交代す



一月より三月に至る御容休一々明記するあたはざれば最御重体の時二日丈爰に記す

時刻	体温	脉搏	呼吸	藥用	飲食物	排便
前	時三八六八六二八				前八時 スープ	前九時 御便通
前	時三八八八六三〇			御水藥	卵黄 三個	少御便通 六時
前	時三七六八四二八			御散藥	前十時 牛乳	中一時 量 十二時
後	時三八八八四二八			御水藥	アイスクリーム 一盃	後一時 量 三時
後	時三九二八四二八			頓服藥	十二時 粥汁一碗	五時 七時
後	時三九二八四三〇			御水藥	葛湯少し	八時 十一時
後	時三八四八一二八			御頓服	五時 牛乳	十一時

一月二十三日

スープ 二〇〇.〇

合計 一三五〇.〇

### 御病症御肺炎

### 摘要部

廿三日午前一時 御熱三十八度四分御咳喇時  
 心臟下部に疼痛あり 氷嚢を貼す  
 二時御吸入施行 三時頃より御咳喇烈しく  
 左脊部に氷嚢を貼す  
 三時四十分頃より御鎮咳後御就眠遊さる  
 四時三十分御醒覺御咳喇烈しく御吸入二回施行  
 行す 御身体に倦怠との事にて右側臥遊さ

る 御咳嗽烈しく直に仰臥に復し給ふ 氷  
囊屢々交換 御口渴甚し

八時三十分 岡先生御來診 御濕布廢去し氷

囊に代る左脊部并に左胸前乳下心臟下部に

御痛みあり

十時ベレッツ教師、岡先生御來診 水蛭法を命せ

らる

午後一時 帶綠黑色水様便中量御排泄、御腹鳴

甚しく瓦斯の排泄多し

午後二時 櫻井先生御來診 同時水蛭三十疋

御疼痛部に貼す 脱落后亞爾箇保兒ガーゼ

貼附し御胸帶を用ゆ

同四時 御体温強きたため御頓服藥(下熱劑)を呈

す

御咳嗽頻發のため屢々御吸入施行

御咳嗽時左乳腺部御疼痛甚し

御食欲なく、食器の音響御耳に入れてすら御乾

嘔遊さる

同六時岡先生御來診 左胸部に絆創膏を貼せ

らる(但)健し胸部の擴張を防がんとす

長さ(一)同時頓服藥を呈す

同七時御鎮咳御睡眠遊さる、御眠時絶す御膽語、

或は御呻吟遊さる 御高熱なるを以て脊部  
御氷囊屢々交換す

同九時御咳嗽頻發せらる 鎮咳劑を呈して御吸  
入を施行す

同時九時四十五分より十一時三十分に至る御  
熱眠遊さる 御眠時瓦斯の排泄多し

十一時三十分御醒覺御咳嗽多きも御咯痰容易  
なり

十二時十五分より御就眠遊さる、御眠時最初少  
しく御苦悶の状ありしも後御安眠遊さる

大關和謹て記す

同二十七日の御容体

時割	体温	脉搏	呼吸	藥用	飲食	排便	排尿
前	時三六、六	六八	二〇	七時水藥	八時シドルクフ	午前十時	四時
前	時三六、二	七〇	二〇	十時散藥	卵黃一五〇〇	泥狀褐	七時
前	時三六、七		二〇	十一時水藥	シヤンバ三個	色量	九時
前	時三七、七	七八	二〇	十二時散藥	九時半	多御放屁	一時
後	時三六、九	七四	二〇	四時水藥	スーパ		四時
後	時三七、二	七八	二四	御散藥	シヤンバ二〇〇〇		七時
後	時三七、四	七八	二四	御頓服	スーパ		九時
後	時三七、五	八〇	二四		赤酒八〇〇		十二時
後	時三七、五	八〇	二四		刺身八切		計

一月廿七日

摘要部

廿七日午前四時御排尿のため御醒覺遊されし  
も直に御就眠 御就眠中絶す御膽語遊さる  
御咳嗽時御胸部の御痛み大に減したり

四時半 粥汁よし  
四時 粥汁  
三時 粥汁  
二時 粥汁  
一時 粥汁  
七時 刺身八切  
七時 アイスク  
七時 リーム  
よし

三三〇〇

御咳嗽三回に一度位の割合にて御咯痰遊さ  
る

午前五時 御顔面及び御頸部等に御發汗あり  
午前七時御醒覺 御含嗽并に御洗面御洗拭等  
も濟す

御水薬を呈す直に御滋養食を差上る

午前九時岡先生來診 昨夜櫻井先生御當直

左撓骨動脈不正今朝來御眠多し醒覺時御氣  
分別に異狀あらせられず  
シヤンパン或は赤酒等を呈するも御脈更に  
觸す

午後二時ベレッツ教師、關先生御來診

午後三時より五時迄御睡眠遊さる

同六時三十分御吸入施行 御夕食御食氣なし

と雖も少く召上る

同六時頃より御咳嗽烈しく御咯痰の量多し(但

し右側臥の爲ならんか)御吸入數々施行す

同八時御熱感あらせらる臨時御体温を測定す

(三十七度五分)濕布帶交換御咳嗽御咯痰益々

烈しく御睡眠なりがたし右側臥のためなら

んかとして、仰臥遊さる

猶御咯痰の量多し御咳嗽のため御苦悶遊さ

る

夜十二時 シャンパン三〇、〇差上る

今朝來上肢左撓骨動脈御不正加るに、右撓骨

動脈御結代あり 御咳嗽烈しきため御身

大に御疲勞の狀なり 御咳嗽時に左銷骨下

部に御痛みあり

御濕布交換數回、御熱感あらせらるゝも御体

温はさまでなし 御咳嗽時少しく御發汗あ

り 御体温三十七度五分、御脈八十、別に御異

狀あらせられさるも御衰弱甚し

本日御滋養惣計

シルクフード 一五〇、〇 スー 一 三八〇、〇

卵 黄 三個、粥——汁 一二〇、〇

刺身 十六切、シンパン 三五、

午前一時より今朝に至る益々御倦怠との事ヤ  
 ンフル御散薬一時より今朝まで三回呈す、御  
 脉微弱にして、御結代あり御嗜眠中偶々御醒  
 覺遊され、御全身の倦怠御訴らる  
 御咳嗽の御困難見上奉るに忍難し  
 御顔色悪しく御指爪の色紫藍色を呈す  
 午前九時岡先生御來診ベレッツ教師御來診御頓  
 服を呈す后少々御輕快遊さるも御咳嗽止る

御吸入數回今朝より御濕布を廢し 御咳嗽、  
 御咯痰の困難七八回に一度位つゝ御排泄其  
 都度大に御發汗あり御咯痰昨夜より少し御  
 輕快遊されしも御排泄時の御苦悶は前と同  
 じ、今朝下肢特に下腿部御冷却遊さる  
 ベレッツ教師御來診の結果芥子末を撒布したる  
 沓下を用へらる 而して湯婆を置く、下腿  
 摩擦法を施行す

明治三十七年一月廿七日

佐々木かく謹て記す

附言

● 日誌の記し方其は病症の輕重によりて種々ありと雖も大略如斯 病院仕込の看病婦は免角先生の口調を採り婦人に不適當なる言葉を使ふ様思はる故に不完全ながらも姉妹等の参考に備ふ

前内務省衛生局長後藤新平君序  
京都看病婦學校教授フレイザー著  
京都看病婦學校教授成瀬四壽譯

挿畫二十餘入  
三百八十頁

實用看護法

上製五十錢  
並製四十錢  
郵稅八錢

本書は専ら看病の業に従事し、又は看病法を知らんと欲する者の爲に、簡明なる文體に傍訓を添へ、看病婦の資格及義務、病室の撰定、食物の與方、藥の與え法、體温、灌腸、洗浴、按摩等、章を十六に分ち、叮嚀に教示解明したるものなり、特志者は殊に之を讀んで此學の知識を加ふるの必要あり、又一般普通の人々も坐右に備へざる可らざる良書なり、救生養身に意ある人幸に一本を需められよ、  
朝日新聞評「看護上必要の事項を擧げ周到懇切を極め獨り看護婦のみならず通常人にも常に一本を具へて參考に供すべき價あり」●日本新聞評「家庭の内一本を備へて學ぶこと可なり」●國民新聞評「親切叮嚀に而も行文は至極簡明に説示したり實用看護法の名に恥ぢず」●早稻田文學評「斯道専門の人々が好個參考書たるのみならず普通の家庭間にありて又有益の書といふべし」

發兌

東京京橋區尾張町二丁目

警醒社書店

文學士倉橋惣三君編

# 基督教こどもの本

大形美本  
定價六錢

ごうしたら一番よく小供に基督教の精神がふきいれられるか編者は此苦心の結果此本を編する事となりました

第一編 いらく

第二編 なみ子のいのり 以下順を追ふて發行致します是

等は皆子供に極く明り易くて基督教の教理を説きしお伽噺なれば世の兄姉方に御使用あらん事を願ひます

矢島楫子題歌  
増野咲子綴

## シオドル物語

定價二十五錢  
郵税二錢

悪少年が遂に救はれて樂しき生涯を送る話を綴りたるもの家庭向の良小冊子なり

鈴鹿正一君譯

## 次郎のおてがみ

定價十八錢  
郵税二錢

是れも亦少年が救はれたる面白き話なり

佐藤紅綠君作

## 悪魔評定

定價三錢  
郵税二錢

子供をして悪魔の懼るべきを覺知せしむる様組立てたる面白き遊戯なり

葛卷星淵君著

## 信仰餘賦 いさゝぼし

定價十八錢  
郵税二錢

信仰より溢れし詩歌集にて靈と情とに充ち讀者をして神恩の暖さに泣かざるを得ず

福田錠二君編

## 處女の死と靈魂不滅

定價八錢  
郵税二錢

可愛き女生徒の死に臨み大なる希望と喜びに充されつゝ此世に別るゝ實情を述べしものにして靈魂不滅を疑ふ者によき讀物なり

# 發兌

東京神田區猿樂町  
二十五番地

# 中庸堂書店



明治三十二年六月二十日印刷  
明治三十二年六月廿三日發行  
明治三十五年三月廿二日再版  
明治卅九年十二月卅日三版

正價 金十三錢

著者兼發行者  
大關和

東京市神田區錦町三丁目一番地

印刷者  
ゼー、エル、カウエン

東京市銀座四丁目一番地

印刷所  
教文館印刷所

東京市銀座四丁目一番地

版權所有

發行所

東京市神田區猿樂町  
二十五番地

中庸堂書店

終

